

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 28

## \* 動物の言語 \*

堤 康徳

私が学生だった 1980 年前後の正月のこと。こたつを囲み、家族四人で麻雀をしていたときだった。長椅子で熟睡していた飼猫が、突如むつくと起き上がり、床に飛び降りるや、長椅子の下に前足をつっこんでもがき始めた。何かを必死にたぐり寄せようとしている。ネズミがいる夢でも見たのだろうか。家族一同あつけにとられ、それから大笑いした。だがこのとき私は確信した。猫も夢を見ることを。もし私に猫語が話せたら、夢の内容を聞き出せたのに残念だった。ひょっとして、夢を見ることと言語能力にはなんらかの関連があるのではないだろうか。ことばがあるからこそ、夢を見るのではないだろうか。

動物のことばを習得することは、いまだかなわぬ人類の夢のひとつであろう。動物行動学者ローレンツの名著『ソロモンの指輪』は、指輪によって動植物の声を聞く能力を与えられたという古代ユダヤの王、ソロモンの伝説にちなむ。

カルヴィーノが編纂した『イタリア民話集』に、動物の言語をめぐる興味深い昔話が二篇収められている。マントヴァの昔話「動物のことば」(23 番)とアグリジェント地方の昔話「動物の言語と好奇心の強い妻」(177 番)がそれである。全二百篇の昔話から成る原著から、百話だけを訳出した日本語版(岩波文庫)には、あいにく、どちらの物語も収められていない。

マントヴァの昔話は、以下のように語り出される。

ある裕福な商人に、才気煥発で学ぶ意欲が高いボーボという名の息子がいた。父親は息子にすべての言語を学ばせようと、たいへん博学な先生に彼をゆだねた。

学業を終え帰宅したボーボがある夜、父親と庭を散歩していた。一本の木のうえで、スズメたちが鳴いていた。耳をつんざくような鳴き声だった。「このスズメたちは毎晩おれの鼓膜を破りやがる」と商人が耳をふさぎながら言った。

ボーボは言った。「スズメたちが何をしゃべっているか知りたいですか？」

父親は驚いて息子を見た。「なんだっておまえはスズメの言うことなんか知りたいんだ？ ひょっとしておまえは占い師か？」

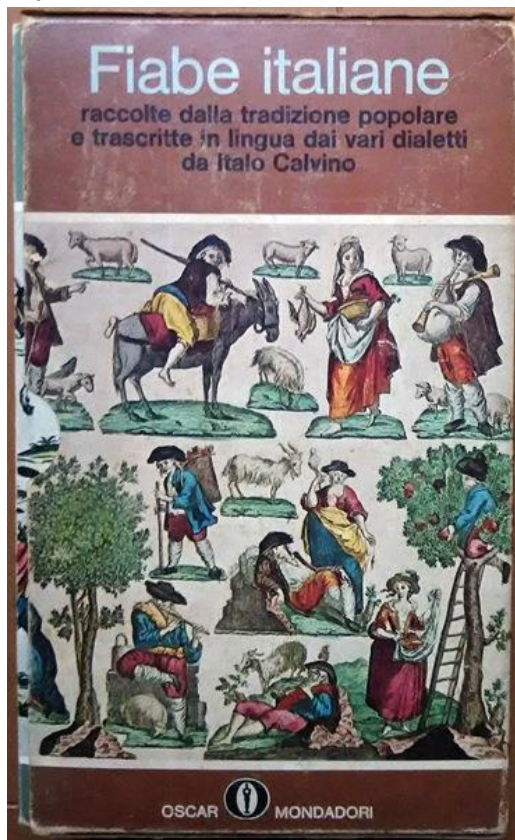
「いいえ、でも先生はぼくにすべての動物のことばを教えたんです」

「ああ、おれはなんたる無駄遣いをしたことか！」と父親は言った。「あの先生ときたら、何をかんちがいたんだらう！ おまえには人間の話すことばを教えてほしかったのに、獣のことばではなく」

「動物のことばのほうがむずかしいので、先生はそれから始めようとしたんです」

ボーボはスズメのみならず、犬やカエルの言語にも通じていた。父親は、自分の金を浪費したことになり、息子が習得した動物のことばが妖術ではないかと疑って、息子を殺すようにふたりの召使に命じる。しかし召使はボーボを憐れんで彼

を逃がしてやる。旅の先々で、動物の言語を理解するポーボは農民たちの窮地を救ってゆく。ある村では、犬の警告によって、山賊の襲来にそなえるように農民たちに助言する。また別の村では、聖体でボール遊びをしているカエルたちの会話から、悪魔にそそのかされた農民の娘が聖体を溝に投げ捨てたことが原因で重い病にあることを知り、娘に聖体拝領を受けさせるように告げるのだ。



【イタリア民話集 表紙】

ある暑い日、ポーボは栗の木陰で休むふたりの旅人に出会う。ローマ教皇が死に、新しい教皇が選ばれるので、ローマに向かう途中だという。ポーボは栗の木に止まったスズメの一群から、彼ら三人のうちのひとりが教皇に選ばれることを知らされる。そしてなんとポーボが、新しい教皇に選ばれることになるのである。物語の結末を引用しよう。

当時、教皇を選ぶのに一羽の鳩が放たれ、人でいっぱいサン・ピエトロ広場を飛んでゆ

かせた。頭に鳩が止まった男が教皇に選ばれねばならなかった。三人は、人であふれる広場に着き、群衆のなかに分け入った。鳩は飛んで飛んで、ポーボの頭に舞い降りた。

歓喜の歌と叫びのなか、彼は玉座に掲げられ、高貴な服を着せられた。祝福するために立ち上がると、静まりかえった広場に叫び声が聞こえた。ひとりの老人が死んだように倒れていたのだった。新しい教皇がかけよると、その老人が自分の父親であることがわかった。後悔のあまり彼は絶命したのだが、息子に許しをこうにかろうじて間に合い、その腕に抱かれて息をひきとった。

ポーボは父親を許し、教会史上最高の教皇のひとりとなった。

主人公が動物の言うことを信じて善行をなし、最後は教皇になるこの物語で、動物に予知能力がそなわっている点が注目される。人間にはない能力を保持する存在として、動物が登場するのである。

カルヴィーノが、巻末に付した注のなかで指摘しているように、これに類する昔話が『グリム童話集』にもある。「三つの言語」(KHM33)と題された物語がそれである。

こちらの主人公は、スイスの老伯爵の息子であるが、賢いポーボとは対照的に、なにひとつおぼえられない愚か者なのだ。その行く末を案じた伯爵は息子のある先生に託すが、彼が学んできたのは犬のことばだった。ふたり目の先生からは鳥のことば、三人目の先生からはカエルのことばを学んできた息子に伯爵はどうとう愛想を尽かし、彼を森で殺すように召使に命じるが、息子を憐れんだ召使はその命を救う。やがて若者は、ある城にたどり着き、城主に泊めてもらえないかと頼む。そこには、決まった時刻に人間をえさとする獐猛な犬たちがいて、城下一帯は悲しみに沈んでいた。若者は、犬たちが魔法にかけられていて、地下の財宝を守るために吠えていることを知る。ぶじ財宝を掘り出した彼は、城主の娘と結婚する。やがてカエルの鳴き声を聞いて自らの運命を悟った彼はローマに行く。ちょうど教皇が死んだば

かりで、枢機卿たちが誰を後継に選ぶべきか迷っていた。彼らが神の奇蹟が現れる者を選ぼうと決めたそのとき、教会に入った若い伯爵の両肩に雪のように白い鳩が二羽舞い降りてきた。枢機卿たちはこれぞ神意だと思い、彼に教皇になるつもりはないかと尋ねる。若者は、自分がその地位にふさわしいか迷ったが、鳩に促され、教皇になることを決意するのである。

カルヴィーノの昔話「動物の言語」でも、グリムの「三つの言語」でも、犬、鳥、カエルが重要な役割を果たしている。これもカルヴィーノが注で指摘していることだが、ストラパローラの『愉しき夜』(第7夜第5話)と、バジレの『ペンタメローネ』(第5日第7話)においても、鳥のこぼを解する若者と、それぞれ別の特技をもつ兄弟たちの冒険が語られている。

西洋絵画において、聖霊は鳩の姿で表現されるが、これは『ルカによる福音書』の次の一節(3:21~22)にちなむ。「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た」(新共同訳)。

ギリシア教父のひとりであるエウゼビオスの『教会史』(秦剛平訳、講談社、2010年、p. 66)には、ローマで「聖なる天からの恵みによって驚くべき仕方です聖職者の地位について」ファビアンズにかんする記述がある。ローマの監督の後任を選ぶにあたり、ファビアンズを候補として念頭に置く者は誰もいなかったが、「そのとき突然、一羽の鳩が高い所から舞いおりて来て彼の頭にとまり、その場に居合わせた全員が、彼を熱烈に支持して、監督の座につけたのだった。

『イタリア民話集』所収のシチリア民話「動物の言語と好奇心の強い妻」のほうは、ボーボが主人公の「動物の言語」とはだいぶ趣きをことにする。

マムシをウナギだと思って食べてしまった若い農民が、動物のこぼを解するようになるが、その秘密を明かせば死ぬ運命にあることを、猫から聞かされる。

若者は羊の群れに会う。羊飼いは、夜ごとヒツジがいなくなることに頭をかかえていた。夜中に羊の群れを見張った若者は、番犬と狼が共謀して

いることを知る。狼と犬のやりとりを引用しよう。

深夜、彼は話し声を聞いた。狼たちが犬たちを呼んでいたのだ。「やあヴィートさん！」

すると犬が返事をした。「やあコーラさん！」

「羊をもらいに行ってもいいかな？」

「いいえだめです」と犬たちが返事をした。

「外に牧童が寝ています」

このような両者のやりとりが、マフィア的な沈黙の掟(omertà mafiosa)を想起させるとカルヴィーノは言う。結局、若者は裏切り者の犬たちを殺させて、新しい犬を見張りに立てる。こうして羊飼いの悩みを解決した彼は、報酬として、雌馬とラバをもらう。

若者と妻が、それぞれ雌馬とラバに乗って、市場の立つ近隣の村へ向かう道中のこと。この動物の母娘の会話を聞いて、笑いをもらした若者に、妻はしつこくその理由を聞く。事情を話せば、自らの命を失うことになる若者は、なんとかはぐらかそうとする。若者は結局、めんどりを蹴散らして餌のふすまを独占する一羽のおんどりを見習い、革のベルトで妻を打ちのめし、力づくで黙らせるのである。

この昔話は、動物の言語のモチーフが背景にあるものの、むしろ、いささか男尊女卑的で封建的な夫婦の教訓譚としての趣きが強い。あるいはやはり、マフィアの沈黙の掟が暗示されているのだろうか。



【鳩の描かれた『キリストの洗礼』(部分)ウフィッツィ美術館蔵】

出典：[https://it.wikipedia.org/wiki/Battesimo\\_di\\_Cristo](https://it.wikipedia.org/wiki/Battesimo_di_Cristo)

(Verrocchio\_e\_Leonardo)

(上智大学講師)

## アシスト選手の悲哀

谷口 和久

イタリアを代表する児童文学作家 ジャンニ・ロダーリの作品に、自転車レースをあつかった詩がある。タイトルは「Il Gregario (アシスト選手)」。

Filastrocca del gregario  
corridore proletario,

che ai campioni di mestiere  
deve far da cameriere,

e sul piatto, senza gloria,  
serve loro la vittoria.

Al traguardo, quando arriva,  
non ha applausi, non evviva.

Col salario che si piglia  
fa campare la famiglia

e da vecchio poi si acquista  
un negozio da ciclista

o un baretto, anche piú spesso,  
con la macchina per l'espresso.

アシスト選手のわらべ歌  
下流層の自転車乗りさ

給仕のごとく エースのために  
身を粉にし

栄光もなく  
エースの勝利に身を捧ぐ

ゴールに着いても 拍手もなく  
歓声もなく

わずかな稼ぎは  
家族を食わすのにやっとこさ

年をとったら  
自転車の店か

エスプレッソ・マシンを置いて  
ちっぽけなバルをひらくのが関の山

(*Il Gregario*, 1960, in Gianni Rodari, *Filastrocche in cielo e in terra*, Edizioni EL, 2016)



【ジャンニ・ロダーリ】

出典: <http://oubliettemagazine.com/2015/01/20/favole-al-telefono-di-gianni-rodari-un-libro-intramontabile-per-linfanzia/>

“Gregario”という言葉は、もともとは「手下」や「兵卒」といった意味合いだが、イタリア語の辞書を引くと、「サイクリングチームのメンバー」という訳もちゃんと書かれている。イタリアでは、それだけ自転車競技に関する語彙が一般化していることのあらわれだろう。

さらに辞書を見ていくと、すぐ近くに“Greggia”という単語が見当たすが、こちらは「羊の群れ」あるいは「群衆」といった意味が記されている。

語頭からも類推できるように、“Gregario”も“Greggia”も、共通のラテン語“Grex”（群れ）に由来する。聖書でも、「“grex porcorum”（豚の群れ）」や「“grex ovium”（雌羊の群れ）」といったように使われている。

ちなみに、フランス語では、一般に“Equipier”エキピエと呼ばれ、イタリア語の“Gregario”同様「チームのメンバー」という意味合いだが、他に“Domestique”ドメスティークという呼び名もあり、こちらは「使用人」あるいは「下僕」といった意味合いで、かなり差別的なニュアンスが含まれる。

このドメスティークという呼び名、そもそも、まだアシスト制度が禁止されていた、すなわち一人一人がまともに風を受けて独力で走らなければならないとされていた時代に、金で買われて他の選手をアシストするようになった選手たちを、悪しざまに「この下僕めが！」とののしったのが事の始まり。そのため侮蔑的なニュアンスが被せられるようになってしまったようで、あまり気安く使える言葉ではなさそうだ。



【レース終盤 疲労困憊のアシストたち @2002 ツール】

第二次大戦前の自転車レースは、現在のようない個人戦ではなく、基本的に「個人の力くらべ」という考え方にのっとり行われていた。国やレースによって考え方や運用はまちまちではあったが、とくにこの考え方を強く推し進めていたのが当時(そして現在も)最大の自転車レースであるツール・ド・フランスであった。

ツールでは、風よけのアシスト選手を使うことはもちろん、ギアチェンジのできる自転車の使用

も「機材に頼った軟弱な行為」として、長らく禁止されていた。

そういった当初の理念も、自転車レースの近代化とともに大きく変わっていった。

機材の進化などは、選手たちからの要求はもちろんのこと、メーカーサイドからの圧力もあっただろう。新しい機材をツールやジロなどのビッグ・レースに投入することは、マーケット拡大を狙うメーカーとしては、最重要課題であった。

風よけのアシストはどうだろう？これもいろんな側面があると思うが、「レースが、はたから見て楽しめるかどうか」という面も多分にあるのではないかと思う。ひとりひとりが黙々と走っているより、集団走行により高速化したレースの方が、傍目にも映える。今どきの言葉でいえば「インスタ映え」か。とくに第二次大戦後に始まったテレビ中継は、この傾向に拍車をかけたことだろう。

もちろん当の選手たちも、四六時中まともに風圧を受けて走るより、少しでも楽に走れる方が、ことに何日間も走り続けるツール・ド・フランスやジロ・ディ・イタリアなどでは、大いに助かったはずだ。

ともかく、一人で何日間も何百キロも走り続けて独走勝利できるような選手はいまだかつていなかったわけで、メルクスやコッピなど、どれほど強い選手であってもアシストの助けなしにツールやジロに勝つことはできなかった。かくしてレースの近代化とともに、下層選手グレガーリオもシステム化されていった。

あるアシスト選手の父親が語った言葉がある。少々長くなるが、書き記したい。

「勝利選手ばかりが一般の関心を呼び、注目の的になる。これはどんなスポーツにも特徴的なことだ。しかし私は労働者が大好きだ。勝ち目のない選手、エキピエが大好きなんだ。偉大な選手は弱小選手がいなければ存在し得ない。トップ選手が、とりわけツールのようなレースでは、どんなに保護されているか、一般大衆が理解しているとは思えない。(中略)」

「山の上で二時間か三時間待っていると、先頭で何が起きているかを目撃するのも楽しいが、後ろから来る哀れな連中がもがく姿を見る

のも……私はそうした連中の方に共感を覚えるんだ。何しろやつらは人一倍苦労しているんだ。(中略)彼らが見えると、何とかタイム・リミット以内にゴールしてくれ、と祈りたくなる。まあ、実際、まったく過酷なスポーツさ。

(「ツール・ド・フランス物語」より)

ここで語られる心情は、たんに自分の息子がアシスト選手だからというだけではなく、ひとりのレース・ファンとしての気持ちを率直にあらわしたもののだろう。

なかでも「私は労働者が大好きだ」という言葉は、冒頭で紹介したロダーリの詩の中にある「corridore proletario (プロレタリアート=賃金労働者)」と符合する。ロダーリ自身も、トップ選手の華やかな活躍以上に、アシスト選手たちの地味で報われない努力に共感を覚えていたに違いない。それにしても“corridore proletario”とは、いかにも共産党員でもあったロダーリらしい表現だ。



【Filastrocche in cielo e in terra 表紙】

出典: <https://www.edizioniel.com/prodotto/i-colori-dei-mestieri-9788867145065/>

ロダーリは、単なる左系言論人であっただけでなく、第二次大戦中からレジスタンスに身を投じた、筋金入りの活動家でもあった。ロダーリに限らず、イタリアでは左右を問わず、有言実行・言動一致の知識人が多い。

右で有名なところでは、作家のガブリエーレ・ダンヌンツィオが志願して軍に入隊し、「未回収のイタリア」であったフィウーメに兵を率いて一時占拠したりした。日本に当てはめれば、右系言論人が義勇兵を率いて尖閣諸島や北方領土に乗り込むようなものか。事の是非は別として、日本の知識人とは骨の厚みが違うのである。ちなみに作家の三島由紀夫が、ダンヌンツィオの信奉者であったといわれる。

ロダーリは戦後になると文学を通じて児童教育に力を入れた。冒頭で紹介した Filastrocca(わらべ歌)も子供むけの詩集に書かれたものである。

裏を返せば、イタリアの子供たちは自転車のアシスト制度、ひいては自転車レースのなんたるかを、小さいころから、程度の差こそあれ理解しているということだ。

メジャーレースや最新の機材それにハウツー情報ばかり(いずれも表層的なことばかり)追いかけている我々日本のにわか自転車ファンとは、これまた骨の厚みが違うのである。

#### [参考文献]

Gianni Rodari, *Filastrocche in cielo e in terra*, Edizioni EL, 2016

Daniele Marchesini, *L'Italia del Giro d'Italia*, il Mulino, 2009  
『ファンタジーの文法』(ジャンニ・ロダーリ著、窪田富男訳、筑摩書房,1978)

『ツール・ド・フランス物語』(デイヴィッド・ウォルシュ著、三田文英訳、未知谷,1997)

『ツール・ド・フランスを知るための100の入り口』(Naco 著、八重洲出版, 2013)

(当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)  
URL: <http://italiakaikan.jp/>